



第 17 回学術会議 懇親会後の集合写真

IFBT
News Letter
No.13
Mar.2026

第 17 回 IFBT 学術会議 神戸大会 特集

2025年10月25日(土)・26日(日)の2日間、神戸市産業振興センターにて国際ブリーフセラピー協会第17回学術会議が行われました。この大会は、当協会が「国際ブリーフセラピー協会」へ名称変更して初めての学術大会となりました。また、まだ記憶に新しい、台風の影響で急遽オンライン大会となったあの前回新潟大会を経て2年ぶりの対面開催でもありました。そしてさらに、この大会、2020年に開催予定だった「幻の」神戸大会。あれから6年の時を経てついに開催に漕ぎつけた、神戸支部の実行委員の皆様にとっても、協会員にとっても様々に意味深い大会でありました。

大会テーマは「組織が変わると、個人が変わる」。今回も多くの先生方からご寄稿をいただきましたので紹介いたします。神戸大会を思い出しながら、どうぞ最後までお楽しみください。

B-1 グランプリ

B-1 グランプリは 2019 年第 11 回

仙台大会以来、実に 7 年ぶりの対面開催となりました。対面開催の最大のメリットであるセラピスト-クライアント間のライブでの相互作用を味わいながらも、一方でこの 7 年間協会 B-1 チームが培ってきたフロアに伝わりやすい魅せ方は健在。バックスタッフとセラピストチームとの対話がライブでスクリーンに流れるなど、いやーほんと、井上先生率いる B-1 チームの総合力がすごすぎました。

仙台・千葉・北海道の 3 支部が予選を勝ち上がり決勝へ進出、そして今年優勝を手にしたのは北海道支部となりました。北海道支部の先生方、おめでとうございます。ここからは B-1 ファイターの先生方のご感想をご紹介します。



南 紀明 (北海道支部)

このたび、神戸大会 B-1 グランプリで優勝という名誉ある結果をいただき、ありがとうございました。このような貴重な機会をくださった大会運営の皆さま、そして予選から本選まで支えてくださった北海道支部の先生方、全国の志を共にする皆さまに、深く感謝申し上げます。

—チームが変わると、個人が変わる

今回の挑戦は、予選を含めすべてオンライン (Zoom) での練習となりました。限られた環境の中で、チームとして呼吸を合わせる大切さを肌で実感できました。本番で実際にチームとして出会えたのは、集合時間の 9 時 10 分でした。トップバッターだったらその後すぐにロープレになっていたところでした。

私たちのスタイルは、あえてメインとサブの役割を固定しないというものでした。練習では、岩岬さんが話をリードし介入を担当してくださり、私はその合間にタイミングを見て例外探しやコンプリメ

ント、スケーリングを挟んで展開していく形が自然にできあがりました。岩岬さんの介入はいつもの確で温かく、そしてユーモアに溢れており、その流れを活かすことを意識しながら、何度も練習を重ねました。

それは、日頃の定例学習会で基本を大切に丁寧に積み重ねてきたことが、この取り組み全体の大きな土台となっていたように感じます。本戦に向けた練習では、浅井支部長と小岩先生が少し難しめの設定でクライアント役を担ってください、何度も繰り返し取り組むことで、私たちそれぞれが持つ「癖」や「強み」が自然に浮かび上がってきました。こうした積み重ねが、チームとしての連携の確かさにつながっていったと思います。

—想定外とブレイクがもたらしたチームの結束

練習ではすべて男性の事例でした。本番で「女性のクライアント？」には驚きました。しかし、この想定外を含めてライブ感を楽しめたことが、結果として良い流れにつながったように思います。

そして本番のブレイクタイム。練習ではいつも岩岬さんが提案役でしたが、岩岬さんの面接の様子に小さな違和感を覚え、初めて自分からブレイクを提案しました。それは練習よりも早いタイミングでしたが、チームとしての直感を信じての決断でした。

ブレイク中には、浅井さん、岩岬さん、そして私の3人が感じていたことが一致しました。この瞬間こそ、「組織（チーム）が変わると、個人が変わる」という神戸大会のテーマを体現した場面だったと思います。あのブレイクが、続く面接の良い流れを作るきっかけになったと思います。

—圧巻の介入と、次なる挑戦への決意

オンデマンド映像を見て、岩岬さんがブレイク中の浅井さんのコメントを、いか

に自然に質問へつなげていたのを知り、改めてチームの和を感じました。特に本戦での岩岬さんの介入は圧巻で、面接の途中でコンプリメントとして伝えたリソースを、クライアント自身が使える形にして問い直していく姿は、クライアントが静かな納得感を得られるものだったと感じます。これはまさに、ブレイク中のチームのやりとりが生んだ成果でした。

最後の講評で、佐藤先生と戸田先生からいただいたコメントを通して、単に「上手くいったかもしれない面接」ではなく、そこに至るまでの見立てや介入の意図を言語化し、チームとして再確認することの大切さを学びました。また、投票してくださった皆様からのコメントも、今後の学びの方向性を示す貴重なリソースとなりました。

昨年の予選で味わった無念さから一年。ご指導くださった先生方、そして支え合った北海道支部というチームの成長の軌跡が、この初優勝という結果につながったと思います。

B-1 グランプリは、まさにチームでつくり上げていくプロセスにこそ醍醐味があると感じています。北海道支部は、この経験を大きなリソースとして活用し、来年、予選からさらに激しい戦いで本選を目指していけたらと思っています。このリソースを活用する支部がひとつでも多く参戦することを願い、私たちも次なる挑戦に向かっていきます。

最後になりますが、暖かなチームワークで大会を盛り上げてくださった神戸支部の皆さま、運営に携わったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

岩岬慶明（北海道支部）

北海道支部ユーモア担当の岩岬慶明と申します。はじめに、学術会議を運営してくださった大会実行委員の皆さま、御講評いただきました森川先生、戸田先生に心から御礼申し上げます。

また、北海道支部長の浅井継悟先生をはじめ、浅井このみ先生、小岩広平先生には御多用の中、何度もトレーニングの時間を作っていただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

今回の B-1 グランプリについての振り返りをさせていただきます。

まず予選では、ある程度それぞれの役割を決めて取り組みました。具体的には、バックスタッフの小岩先生（予選時）とパートナーの南さんが見立てと質問を考え、ユーモア担当の岩岬が介入を考えるというものです。小岩先生と南さんのおかげで、予選当日は地に足ついた介入を提案できたかと思います。

本選では、プリーフセラピーの基本に沿った面接を心がけました。【どのような悪循環や例外が見られるのか】、【どのようなリソースがあるのか】等を丁寧に聴くことに注力できたかと思います。

北海道支部は、日々のトレーニングはすべてオンラインでの実施となりました。練習時、実際に顔を合わせて面接をしていないため、難しさを感じることもありました。だからこそ、本選当日は、とても面接がやりやすく感じ、楽しみながら取り組むことができたと思います。

私自身、今回初めて B-1 グランプリに参加させていただきました。皆さまのおかげで目標としていた優勝にたどり着いたことは良かったですが、個人的には反省点が多いと感じています。パートナーである南さん、バックスタッフである浅井このみ先生（本選時）に大変助けていただきました。来年は私がチームをサポートできるように、日々の臨床実践を大切に、自己研鑽に努めたいと思います。

この B-1 グランプリのおかげで、【プリーフセラピーをより深く理解し、極めたい】という思いが一層強くなりました。改めて、このような貴重な機会を与えてくださった関係者、参加者の皆さまに御礼申し上げます。

次に皆さまとお会いするときには二回以上成長した姿をお魅せします。



浅井このみ（北海道支部）

北海道支部の補欠登録をし、本選ではバックスタッフを務めさせていただきました浅井このみと申します。この度はこのような貴重な機会をいただき感謝申し上げます。

まず、予選から北海道チームを応援いただいた皆様、小岩さんのファンで本選でも楽しみにされていた方々には、急遽メンバーが変更になったこととお詫び申し上げます。そして、B1 が二日目のプログラムにあったことで、メンバーが揃うのが当日の朝になってしまいました。現地でもお伝えしましたが、北海道支部の活動は全てオンラインで行っているため、対面でメンバーが揃うのはこれが初めての機会でした。不安と期待を膨らませつつ、私は集合時間ギリギリに会場に到着したのですが、そこではすでにセラピスト役のお二人がコミュニケーションをとっている姿が目に入り、心配は無用だったと感じました。競技開始後もお二人のチームワークはいつも通りかそれ以上で、焦らず余裕を持って判断をしていたようにみえました。実際、オンラインでの練習時には、通信の影響があったり、ブレイクを取る際にクライアント役に一旦zoomの待機室に戻ってもらうなどしていたため、対面ではそうしたわずかながら貴重な時間が節約され、余白として機能したのかもしれませんが、私といえば、短く、しかし意図が伝わるコメントを心がけていましたが、直接のやり取りはないと

はいえ、とても緊張しました。終了後は緊張が解け、変なテンションになっていました。北海道支部は三番手であったため、他の二支部のパフォーマンスを見ることがなく休憩に入りました。その時から皆様には暖かく「よかった」というコメントをたくさんいただき、あの場でできることはやれたのだなと思ったのでした。講評後の発表では優勝という結果をいただき、これまでのチームでの努力が実を結んだ嬉しさを実感できました。B1 では白河の関はとつくの前に壊されて無くなっていることと思いますが、今回は津軽海峡を越えることができ感無量です。

大会後も、配信を視聴して振り返ったり皆様からの応援コメントを読ませていただいたり、反省と学びは続きます。改めて、貴重な機会をいただいたこと感謝申し上げます。

基調講演

リーダーシップとチームの進化

今大会では、基調講演の講師に荒木香織先生をお迎えし、「リーダーシップとチームの進化」と題してご講演をいただきました。岩本先生から感想が届いています。



岩本 脩平（京都支部）

「あなたはリーダーシップがありますか？」と問われたら、「ありません」と堂々と言い切ることができる…と思っていました。私が普段勤務している職場は学校ですので、中心的に動かれるのは教員の方々です。心理職はほとんどが非常勤で、先生方の教育活動の周

辺で、あくまで補助的な支援や活動を展開していく立場です。そもそも学校の先生方は30~40人の児童生徒と毎日のように対話を重ねながら、時には教え導く役割を担っておられます。私から見れば、どの先生方もリーダーシップを発揮しておられ、子どもたちの日々の成長に資する役割を担っておられるように見えるのです。そんな先生方と比較して自分にリーダーシップなんてあるわけがない…と思っていました。この講演を拝聴するまでは。

今大会の基調講演は「リーダーシップとチームの進化」というテーマで、自分としては「こういうリーダーがいてくれたらいいなあ」と妄想をふくらませる時間になるのかなと思ってホールに座っていたのですが、荒木香織先生のお話をうかがって「リーダー」の考え方が変わりました。特に記憶に残っているのは「シェアド・リーダーシップ」の概念です。誰か一人が集中的な全領域におけるリーダー役割を担うのではなく、それぞれの個性が生きる形で領域ごとにリーダーを置くという発想なのですが、考えてみれば納得のいく内容です。学校にも校長や教頭といった管理職だけでなく、教務主任がいれば、生徒指導や教育相談の主任もいます。保健部主任、生徒部主任、ICT担当等、それぞれの年齢や経験、得意や専門性を考慮して校務分掌が決まっています。運営の実際を考えてみれば、「そりゃその方が合理的だし、負担も分散できていいよね」と思えますし、自分にも色々あるうちのひとつの領域のリーダーをやって欲しいと言われれば、「その領域に限っては頑張れるかもしれないし、それならばリーダーシップをとれる」と思えます。ですが、いざ「リーダーシップ」という言葉を耳にした瞬間、その言葉の持つイメージにびびってしまう人が多いのも事実ではないでしょうか。おそらく私達は（私だけかもしれませんが…）、リーダーに対して「発する言葉にはいつも説得力があって指示も的確、

決して人任せにせずに自らも動き、その行動力は圧巻。耳の痛いことも臆さず発言するし、周囲の失敗の責任であっても自ら背負うことができ、誰からも信頼されるような人望の厚い人物」を想定してしまっているのかもしれない。そんなスーパーリーダーは今や漫画や映画の世界にもいないというのに、ついつい幻影を求めてしまっていたのです。講演中に自己反省をしていたところに、さらに荒木先生の言葉が刺さりました。「指導している競技ではなくて、選手達が好きな監督のもとでチームは強くなる」。そうだ。いつも学校で先生方が自分に見せてくれているのではないか。どれだけ大変なクラスを受け持っていたとしても先生方は「まあ子どもたちはかわいいから、何があっても最後まで見てやらなくちゃって思うだけだね」と笑っておしゃっているのではないか。そして児童生徒のことが大好きな先生が受け持っているクラスは最終的に「クラス替えしたくない！」と子どもたちに言わしめる素晴らしいクラスになっているのではないか。そのようなクラスには、子どもたちを成長させたいと願うリーダー（先生）のマインドセットがあり、その信念から生じる関わりが、チームとしてのクラス集団を伸ばしていくサイクルを形成・維持しています。リーダーの適切なかかわりとチームの成長が往還的に行われているという理解は、ブリーフセラピーの背景理論とも相性が良く、すんなりと受け入れることができました。

さて、私達心理士やブリーフセラピストも後進の育成指導という課題があります。複数心理士が勤務する職場の中での指導もあれば、心理士会や学術団体といった組織の中での指導もあるでしょう。このとき、荒木先生がおっしゃっていた「学ぶか、学ばないか」という軸の存在は非常に重要です。実践がうまくいか、いかないかは事例検討やSVでも振り返りをしていきます。その際に、失敗ばかりをあげつらっても仕方ありません。何ができていて、何を次の課題とす

るのか。それに気づけるような場を提供していくことで、専門職、資格としての質の担保と地位の向上を目指せると考えています。その実現のためにも「シェアド・リーダーシップ」の考え方で「ちょっとだけリーダー」をやっていきたいと思います。

ワークショップ振り返り

今大会では4本の対面WSが行われました。今回はお二人の先生から感想をご紹介します。

東豊先生×坂本真佐哉先生 WS「面接室での会話を楽しむコツを見つけよう」



辻美穂子（神戸支部）

神戸大会の開催に当たり、私は運営スタッフとして受付や会場設営等に携わることになっていました。しかし特別WSに東豊先生と坂本真佐哉先生という憧れのお二方がタッグでご登壇されると伺い、参加を懇願したところ希望が叶いました。また、お二人揃ってのWSが今世紀に入って初めて（1993年以来30年ぶり）と伺い、正に千載一遇の機会に恵まれたと思います。

WSの冒頭、先生方から『面接室での会話を楽しむコツを見つけよう』をテーマにアドリブ的に、ほぼ全部即興でやるため遠慮なく何でも聞いてほしい」と伝えられました。すると参加者からは、ここぞとばかりに臨床現場での困りごとや様々な疑問・質問が投げかけられます。東先生は一意専心に耳を傾けられ、スパッと俊敏に回答されていました。また坂本先生は東先生のコメントに関連するエピソードや、参加者が疑問に

思ったり分かりづらいつ感じたりしていることを察して丁寧に解説されるなど、息の合った連携は実に見事でした。

ここで、自分自身のことを少しお話ししたいと思います。私は、昼間は大学職員として主に学生支援に携わり、夜間や週末のプライベートな時間にSNS相談員として活動しています。SNSでは希死念慮が見られる方が多く、また介入には所属先での制約があるため、なかなか会話を楽しむには至りません。しかし、先生方と参加者との織りなす会話を聞いているうちに、私も同じように感じたことがあることが思い出されました。「こんなところがあつたんや」、「これまでこんな風に頑張ってきたんやね」などCLの持つリソースが発見できた時の驚きや喜び、そして終了後に「今日の相談は良かったな」と振り返れた時は、確かに楽しいと感じていたかもしれません。

先生方が繰り返し述べられたのは、「臨床現場では『…ねばならない』や『…すべき』といった周囲の圧力を感じて、それに対して負けたり、自分自身への評価に対する焦りがあるかもしれない。そんな時こそ目の前のCLのリソースに興味や関心を持つこと。相手のニーズに合わせた成功の枠作り（変化・不変化のどちらでもOK）、システムを広げて捉えて考えること」等でした。これらの実践と上達が会話を楽しむことに繋がる気がします。

WSは、終始和やかで親しい雰囲気の中で進められ、瞬間に2時間が過ぎました。今回初めて対面でお会いした東先生、坂本先生は温かく優しいお人柄で、私は益々ファンになりました。特別WS参加の機会を頂き、大変有意義な学びと経験を得ることができ、深く感謝しております。

生田先生 WS「対人システム論—とて も簡単！踊ればわかる—」



宮原克介（大阪支部）

「踊ればわかる」は、私たちの「知性」という重い鎧を脱ぎ捨てさせ、対人システム論の真髄を「身体」へと叩き込んでくれる衝撃的な体験でした。今回、大阪支部の宮原克介が、共に参加した3名の熱い感想と、その後に行われた支部例会でのエピソードを交えてレポートします。

理屈を越えて「体」が理解した瞬間——「踊ればわかる」が教えてくれた対人システム論

ブリーフセラピストは日頃、システム論や相互作用を「頭」で理解しようと苦心します。しかし、生田先生は「机と椅子を隅に寄せなさい」と、私たちをフロアへと誘いました。

1. 「不安定」こそが移動のエネルギー

八木さんは、当初「不安定」への恐怖から、一人で静止できる場所を探そうとしていたと言います。しかし、ワークを通じて「不安定だからこそ移動でき、踊れる」という真実に触れました。「ブリーフは、不安定なままでも世の中の仕組みと連動して動けていれば OK とする。文字にすると難しい響きですが、踊ればこれがサクッとわかるから凄い！」

藤崎さんもまた、自身の身体の硬さを自覚しつつ、「ダンスも家族も、完全な安定は“死”を意味する」という生田

先生の言葉に、難解な教本以上の納得感を得ました。「揺らぎの中にこそ安定がある。Shall we ダンス（ブリーフ）？の答えは、もちろん Yes です！」

2. 「関係」というユニットのダイナミズム

大島さんは、社交ダンスを「対人システム」として精緻に分析してくれました。一人の踊り（クローズド・システム）では重心は自分にありますが、ペア（オープン・システム）では重心は「相互補償」され、システムは一瞬ごとに再構成されます。ワークでは、同じ目標に向かう際、互いに一点を見つめるのではなく、あえて「15 度外側」を目指すスムーズに歩けることを発見しました。「要素の和は全体ではない」。ほんの少し視点をずらす「ゆとり」が、ユニットとしての前進を可能にするのです。

3. 大阪支部での実践と生田先生からの金言

学術大会の興奮冷めやらぬ中、大阪支部の例会でも早速このワークを再現しました。「3人で引っ張り合っても動かないのに、クルクル回ると簡単に動く！」という発見にフロアは沸きました。この報告に対し、生田先生から以下の深いコメントをいただきました。

「相手を動かそうとすると動かない。でも、動かさないぞと思わせる方向から進めば相手はなぜか動く。これは対人システムの抵抗処理の本質です。相手から意識を外し、自分の存在を後ろ側に漠然とさせて進行方向へ進むと、あら不思議、相手は軽く動いていくんです」まさに、「治そう（動かそう）と思ったらダメ」。治すぞと想着いても、身体は「治さないよ」という動きを完璧に行う。この逆説的なアプローチこそ、ブリーフセラピーが「踊り」から学べる最大の技法だと痛感しました。

結びに代えて：身体に沁み込んだ「ブリーフの感覚」

来年受験のメンバーは、「試験勉強もしない！」と気を引き締めています。しかし、今回のワークショップを経た私たちには、もう「知識だけの勉強」は必要ないのかもしれませんが、相手に迷惑をかけないようにと踏ん張るのではなく、相手の周りの「空気」から動かしていく。リーダーとフォロワーの役割を柔軟に入れ替えながら、変化し続ける。「踊ればわかる」——その言葉通り、私たちの身体には、教科書を何回読んでも得られなかった「システムの拍動」が確かに沁み込みました。貴重な学びの機会をくださった生田先生、そして共に汗を流した仲間々に心から感謝いたします。

レポート作成協力：八木千恵子氏、大島潤子氏、藤崎悟氏

Division からお知らせ

ここところ、協会内ではいくつかの Division（部会）が立ち上がっています。今大会では、いくつかの Division の活動をうかがい知ることのできるような企画が、主に自主シンポジウムの形式で行われました。まだ協会内でも始まったばかりの Division 活動。知らないことが多く、また魅力的で気になりますよね。大会で企画をされた Division ご所属の先生方に、各 Division での活動について伺いました。



Couple Therapy Division

戸田さやか（IFBT カウンセリング・オフィス東京室長）

2026 年度から、Couple Therapy Division が本格始動します。この Division では、普段からカップル同席のセラピーをする機会があるけれど自信がない方、やってみたくけれど練習の機会がない方が、「私はカップルセラピストです」と胸を張れる状態を目指していきます。具体的な活動としては、オンラインの定例研修会でロールプレイやケースコンサルテーションを予定しています。

「私、カップルセラピーってやったことないんです」ですって？大丈夫。みんなで練習しましょう。

「カップルセラピーって、カップルの愛情や性的問題を扱わなければならないんですよね」ですって？そんなことはありません。カップルセラピーの主訴は多岐に渡ります。

この Division では、長年にわたりカップルセラピーを実践してこられた長谷川啓三先生のご指導のもと、福田凌先生（京都支部）、岩本千華先生（千葉支部）が参加者をサポートしてください。支部を超えて、多くの先生方と練習できるのを楽しみにしています。

School Consultation Division



與那城武尊（京都支部）

みなさんこんにちは。School Consultation Division (SCD) は、教育臨床の現場でブリーフセラピーを活用したい実践者が学び合える部門です。SCD では、教育臨床周辺におけるブリーフセラピーの理念と技法を学

び、実践的な支援に活かすことを目的としています。理論だけでなく、現場での実践を意識した学びの場を提供し、参加者同士が互いに刺激し合い、教育部門のブリーフセラピストとしての専門性を高めることを目指して“現場で使える実践”に焦点を当てた研修を行っています。

今回の神戸大会においては、自主シンポジウムとして当 Division の紹介と企画メンバーの実践知を参加者の皆さまと共有させていただきました。また 2 月 22 日には『後夜祭』としてシンポジウムの振り返りをしつつ、参加者の皆様からの質疑にお答えしたりと相互合流しながら学び合う機会を企画しています。

SCD では、初学者の方も経験豊富な方も、同じ土俵で語り合える「相互に刺激し合う学びの場づくり」を大切にしています。

教育の現場では、日々たくさんの人と出来事が関わり合い、複雑な課題が生まれます。その中で迷ったり、立ち止まったりする瞬間は誰にでもあります。SCD が、そんなときに「ひとりでは気づけない視点」や「次の一步のヒント」を一緒に見つけられる場になることができれば嬉しいです。皆さまと共に学び、実践を豊かにしていけるのを楽しみにしています。

森田正馬研究 division

鴨志田冴子（仙台支部）

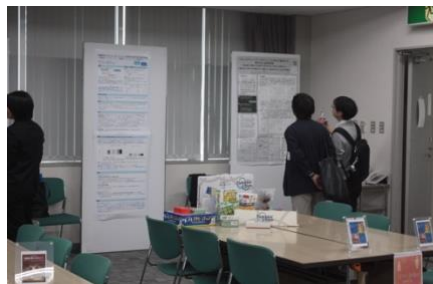
この度、森田正馬研究 Division の立ち上げについて仰せつかりました、山形大学の鴨志田と申します。森田正馬研究 Division は、「100 年前に誕生した短期療法」と称されることもある「森田療法」に関して学ぶ部会になります。具体的には、短期療法家が、森田療法を創始した「森田正馬」の考えを中心に学ぶことで、今後の臨床に

どのように活かせるかを検討します。森田は不安や神経症の発生機序となる「とらわれ」による悪循環の見立てを 100 年前に提示し、そこから抜け出すためのさまざまな哲学を述べています。悪循環を見立てる点は、特に短期療法と類似性が高いですが、森田正馬は症状をとらわれだけに注目し介入しているわけではなく、そこを超えて、生活や人生全体を含めた物事への態度などの独自の考えをもっているように解釈します。さらに、身体を使う、身体を取り入れて考えることについても考えさせられます。それらが、短期療法との違いを感じる点でもあり、勉強になる点だと思います。森田療法を学ぶことで、反対に、短期療法の理解が深まることもあるかもしれません。

森田正馬研究 Division ですが、第 16 回新潟大会にて「短期療法と森田療法の交差点」、第 17 回神戸大会にて「運動森田療法の開発に向けて」というタイトルで、自主シンポジウムを 2 回開催しました。今年度最後には、日本森田療法学会ご所属の精神科医の先生をご招待し、東北地方での森田療法研究会と共催で、特別講演を開催します。詳細が上がり次第、会員の皆様にご案内させていただきます。来年度は、年に何回かの定期開催を予定しておりますので、決まり次第、ご案内させていただきます。随時ご査収のほどよろしくお願ひいたします。



フォトコーナー



国際ブリーフセラピー協会 第 17 回学術会議 大会記

第 17 回学術会議 大会長 岩崎恵美（神戸支部長）

2025 年 10 月 25 日～26 日に神戸市産業振興センターにて対面開催をメインとした第 17 回国際ブリーフセラピー協会神戸学術大会が催されました。同時に Web 大会も実施し、11 月 30 日で幕を閉じるまで多くの方にご参加いただき、大盛況の中で惜しまれつつ無事に終えることができました。皆さまの多大なるご理解とご協力のおかげだと感謝しております。

今年のテーマは「組織が変わると、個人が変わる」でした。ブリーフセラピーは小さく介入して大きな影響を与えるものですが、逆に大きなところを整えると、自ずと個人にも影響を与えることとなります。今回はそんなパラドックスを狙ったテーマのもとでたくさんの発表系、そして WS、基調講演、B1 グランプリと盛りだくさんの価値高いコンテンツを提供できたと思っております。神戸支部は大学にゆかりが無く、どうやって開催にこぎつけようかと悩ましいところでしたが、その点も東豊先生、坂本真佐哉先生にご協力いただくことができました。当日は神戸支部だけでなく大阪支部をはじめ、会計では山形支部などたくさんの支部からお手伝いいただくこともできました。発表系でたくさんのコンテンツを出してくださった京都支部、遠くから当日のお手伝いを買って出てくださいました方々も多くいらっしゃいました。神戸支部だけでは開催できなかったと思います。初めに開催が決まったときに生田倫子理事長に計らっていただき、東先生と坂本先生に加わっていただくことが決まった時にほっとしたことを覚えています。B1 や会計、合コンなどについても生田理事長のお考えの元、分業が進み運営の組織化が形作られた年になったともいえるのではないかと思います。これぞ大会テーマを実演できたことではないかと嬉しく思っております。B1 グランプリについても大きな挑戦を致しました。井上智博先生中心に対面開催に戻す試みが実行されました。会場に事前に足を運んでくださり、会場の設営のスタッフとやり取りを重ねてくださいました。B1 は機器のトラブルも予想されることがあるので、慎重に検討を重ねてくださいました。当日を迎えてうまく終えるまで相当な心労を伴ったことと思います。本当にありがとうございました。井上先生は B1 が終わった後も機材周りをその日一日駆け回ってくださいました。感謝しております。

また国際ブリーフセラピー協会と名称変更されたはじめての学会ということもあり、花田里欧子先生のもとで 2 本の国際化企画にも挑戦できました。一本は論文を英語で整える視点で、またもう一本については海外に日本のブリーフセラピーの最先端を輸出する視点で届けることができました。

神戸大会は元々 2020 年に開催予定でした。2019 年の秋から会場を抑えて、生田理事長に東先生と坂本先生と繋いでいただき、WS についても東先生より各方面の先生方をご紹介いただき、それぞれの先生方にご快諾いただいていた矢先に、皆さんご存じの通りコロナ禍に突入してしまいました。各種学術大会は軒並み中止になり、オンラインに移行する大会が出てくる中、難しいご決断を生田理事長にいただきました。後を引き継いでくださったのは平泉拓先生率いる若手 35 アンダーの先生方でした。神戸支部の面々はオンラインに疎く Web での開催は今までになく途方に暮れていたところを救ってくださいました。どれだけありがたく心強かったか、思い出されます。

それから 5 年の月日が流れ、会計や当日のお手伝いを 5 年間やってきたことは、2025 年の神戸大会の準備期間だったように思います。焦ることなく毎月少しずつ進めてこられたのは、2020 年のハプニングを周りの多くの方々に助けられたことで、うまくコーディネートできたのではないかと感じております。

新しい試みとして本部から平泉先生と下川さんを迎え、会計担当であり 2026 年の山形大会のメンバーである伊井先生、樋口さん、武谷さんを運営会議メンバーに迎え、平泉先生のご提案で毎月一度会議を開いてきました。名付けて「神戸大会 solution 部」。1 年間に及ぶ毎月の会議で進捗状況を確認しながら進めてきました。お忙しい中、メンバーの皆さんにはお時間と惜しみないご協力を頂きました。感謝してもしきれないなと感じております。

最後になりましたが、HP 作りからバックオフィスのほとんどすべてを担ってくれた神戸支部運営メンバーの林紀代子さん、そして広報のすべてを担当してくれた竹下善子さん、二人が支えてくれたからこそ素晴らしい大会に仕上がりました。つたない大会長を支えてくれて、本当にありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

こうして多くのご協力を頂く中で幕を閉じていきますが、たくさんの感想をいただく中で、じんわりと心に残る大会になったことが一番の収穫だと思っております。

2026 年は山形大会です！バトンをつなげていけることに感謝しています。来年、山形で再会いたしましょう！本当にありがとうございました。

国際ブリーフセラピー協会 第 18 回学術会議のお知らせ



山形大会では、「温故知新」をテーマに、ブリーフセラピーのこれまでを「人と物語」を中心に振り返り、これからのブリーフセラピーを考える大会を目指しています。ゲストに東畑開人先生をお招きし、魅力的な企画を考えているところです。ちょうど5連休のはじめの2日間、美味しいものや温泉の情報もご用意する予定ですので、この機会に山形観光を満喫していただければと思います。

どうぞ、よろしくお願いいたします！

編集後記

ニュースレター第13号、神戸大会特集をお届けしました。神戸大会を語る上で忘れてはいけない存在がいます。それはこのマスコットキャラクターの「シャクシャク」！2025年は大阪・関西万博が開催されていましたが、あのキャラクターにどこか似ていますね…？そしてもう1人、このキャラクターのモデルになっている方がいて、それは某大会長だとか…？この2人の掛け合わせで生まれたシャクシャクがかわいくないわげがない！LINEスタンプも販売されていますよ～。私は購入しました！（No.13担当：田辺 瑠美）

国際ブリーフセラピー協会 News letter 編集委員

- ☞ 花田 里欧子（東京女子大学）
- ☞ 田辺 瑠美（龍谷大学こころの相談室）
- ☞ 福田 凌（カウンセリングオフィス SHIPS）

お問い合わせ先：nfbtkyoto@gmail.com

発行：国際ブリーフセラピー協会

